# 卒業論文執筆要綱

（言語学・応用言語学専門分野内規）

九州大学文学部　言語学・応用言語学専門分野　2020（令和2）年度

(1) **書式**：横書きとする。A4 版で、横 40 字×縦 35 行＝1400 字（フォントサイズ 11pt）を 1 枚とする。フォントは、原則的に日本語は「MS 明朝」、アルファベットは「Times New Roman」を使用する。マージン（余白）は上下各 30 ミリ、左右各 25 ミリとする。製本して提出すること（製本機は研究室にある）。

(2) **表紙**：表紙には 題目・専攻・学生番号・入学年度・氏名・提出年月を記入する。副題がある場合は題目の下に副題を記入する。入学年度は「20xx（平成〇）年入学」と記入し、提出年月は「2021（令和 3）年 1 月提出」と記入する。

(3) **背表紙**：背表紙には氏名・提出年（西暦・半角アラビア数字）・題目を印字したラベルを貼る。

(4) **題目**：内容を的確に表すものとするよう留意すること。題目は 11 月末の平日（2019 年なら 29 日金曜日）に教務第一係に届けたものと完全に同じでなければならない。届けた題目に加えて、―・・・―のような副題を付けてもよいが、あまり長くならないように留意する。なお、題目に余計な「　　」を付したりしないこと。

(5) **要旨**：　表紙の次頁に、本文の内容を簡潔にまとめた要旨を 400 字程度で記す。

(6) **目次**：要旨に続けて目次を付ける。また、各章には簡潔な表題を付け、内容を概観できるようにすること。

(7) **本文**：　内容に応じて、適切に章・節に分けていく。各章において以下の点に留意する。
[章番号は 0. または 1. から始める。下の例における章の立て方、章の表題は、あくまで説明のための例である。特に「本論」の部分は、実際にはいくつかの章に分かれ、扱おうとする現象に即したタイトルになるであろう]

0. 序章（はじめに）
⇒ 問題点を明確に述べる。すなわち、何が分からないのかをはっきりさせる。次に、その問題をどのように解決していくのか、論文全体の方針を明確にする。さらに、当該の卒業研究が（応用）言語学のどの分野のどのような研究として位置付けられるかを明確にする。

1. 従来の研究のまとめ
⇒ 当該の研究分野において従来どのような研究がなされてきたのかを述べ、その問題点や当該の卒業研究がそうした従来の研究とどのように異なっているのかを述べる。

2. 本論

⇒ 解明しようとする問題に対して、どのようなデータがどのように関与しているのかを明確に述べる。論文全体の論旨の流れがはっきりと分かるように書く。すなわち、提起された問題と提案された結論との間に、無理なく論理的整合性が保たれるように書くこと。

3. 結論

⇒ 結論並びに結論へと至る道筋を論理的に明確に述べる。

(8) **頁数**： 本文の第 1 頁から頁数を記入する。

(9) **枚数**： 基準は論文本文で 16,000 字程度。要旨・目次・注・参照文献等は数えない。

(10)**書き方**：基本的な表記法を確認しておくこと。特に、行頭にくる句読点は前の行の行末にぶらさげることや、例文番号以外の（）・「」・『』などは 1 字分を用いること、改行の後の行頭は 1 字下げにすることなどに注意する。誤字・脱字・当て字・文法の誤り等は減点の対象となるので気を付けること。

(11) **引用**：論文や著書などから引用する場合には、例えば、

早田 (1985: 42)は、「...」と指摘している。

Sakamoto (1990: 731-732)によれば、この現象は(49)のように一般化できる。

などのように記す。あまりに長い引用は避けるようにする。

※ 卒業論文は研究論文なので、無断引用が判明した場合には直ちに不合格となる。

(12)**注**：注の必要な場所に番号を記し、脚注、または本文の末尾にまとめた注のいずれかにする。

(13)**参照文献**：下記の『言語研究』の執筆要項に従う。以下、『言語研究』最新号から引用。

************************************************************

**1. 特殊文字ならびに日本語のローマ字化**：

ギリシア文字・キリル文字以外の特殊文字はローマ字化する。音声字母は可能な限り国際音声学協会所定のもの（最新のもの）を用いる。造字を要する特殊文字は，必要不可欠の場合を除き，避ける。欧文論文における日本語のローマ字化は次の方針に従う。

a. 例文については訓令式を用いる。

**例** zibun（自分），bunpoo もしくは bunpō（文法）

b. 参照文献（欄）については下記の①～③を除き，ヘボン式を用いる。

**例** Kindaichi（金田一），…ni tsuite（…について）

① 固有名詞については，慣例に従う。

**例** *Gengo Kenkyu*（『言語研究』），Takesi Sibata（柴田武），S.-Y. Kuroda（黒田成幸）， Mamoru Saito（斎藤衛），Kurosio（くろしお出版），Hituzi Syobo（ひつじ書房），
Tokyo（東京）［地名］，Osaka（大阪）［地名］

② 撥音の「ん」には一貫して n を用いる。
**例** bunpoo（文法），onbin（音便）

③ 長音は固有名詞の場合には母音字の上に横棒（マクロン）を付し，固有名詞以外ではマクロンを用いた表記か，同じ母音字を続けて書く表記を用いる。

**例** Ono（小野），Ōno（大野），Satō（佐藤） hoogen, hōgen（方言），
kenkyuu, kenkyū（研究）

**2. 例文表記：**
例文と本文の間は 1 行空ける。例文には丸括弧で通し番号を付け，字下げせずに左揃えとする。執筆言語と異なる言語の例文には，必要に応じて，各単語ごと（場合によっては形態素ごと）にグロスを，そして全文の訳を以下のいずれかの方法に準じて付ける。また，使用する略語は別途説明する。

(1)
ba naashnish.
for him I work
'I work for him.'

(2)
b-a naa-sh-nish.
3OBJ-BEN ADV-1SG.SUBJ-work
'I work for him.'

(3)
b-a naa-sh-nish.
3 目的-受益 副詞-1 単主語-働く
「私は彼のために働く。」

(4)
Hanako wa imooto to eiga o mi-ta.
Hanako TOP sister with movie ACC see-PAST
'Hanako saw a movie with her sister.'

**3. 注および参照文献：**
注は通し番号を付け，論文末に別紙にまとめる。参照文献は，本文または注において引用または言及されたもののみを，次の形式に従って論文末に別紙にまとめる。

a. 項目は第 1 著者のアルファベット順に並べる。
b. 同一著者の文献は発表年の順に並べる。
c. 同一著者の同一年の文献には a, b, c などの添字を付ける。
d. 同一の単行本から複数の論文が引用されている場合には，単行本を編者名による 1 つの項目として立て，各論文はそこへの参照とする。
e. 著（編）者名は，N. S. Trubetzkoy, R. H. Robins のように慣例的な場合を除き，フルネームを使用し，イニシャルを用いない。
f. 各項には，著（編）者名，発行年，論文名，頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

**［雑誌論文］** 第 1 著者名・他の著者名(発行年) 「論文名」『雑誌名』巻数: 頁数.（巻全体で通しの頁番号が打たれている場合は巻数だけで，号数は不要。号ごとに頁番号が付けられている場合のみ，巻数と号数を記す。）

**例**　佐久間鼎 (1941)「構文と文脈」『言語研究』9: 1−16.
**例**　服部四郎 (1976)「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2−14.
**例**　Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37−120.
**例**　Kay, Paul and Chad K. McDaniel (1978) The linguistic significance of basic color terms. *Language* 54: 610-646.

**［論集などに所収の論文］** 第 1 著者名・他の著者名(発行年)「論文名」編者名（編）『論文集名』頁数.出版地：出版社.

**例**　金田一京助(1955)「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727−749. 東京：研究社.
**例**　上野善道(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫（編）『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』231−270. 東京：三省堂.
**例**　Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171−202. New York: Holt, Rinehart andWinston.

**［単行本］** 第 1 著者名・他の著者名(発行年) 書名．（必要な場合は）版，（該当する場合は）シリーズのタイトルと巻号. 出版地：出版社.

**例**　柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京：大修館書店.
**例**　林四郎・南不二男（編）(1974)『世界の敬語』，敬語講座第 8 巻. 東京：明治書院.
**例**　Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.
**例**　Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates.* Cambridge, MA: MIT Press.

**［学位論文］** 著者名(提出年)「論文名」学位論文の種類，大学名.
**例**　南西太郎 (2005)「南西語音韻論研究」博士論文，南西大学.
**例**　Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

・欧文の著書・論文名は，それぞれ項目の頭文字（および固有名詞）のみを大文字とする。（ただし，ドイツ語の名詞のように慣例的に頭文字を大文字にするものは，それに従う。）
・邦文で執筆された単行本，論文を欧文論文で引用する場合は，上記の欧文文献の表記に準ずることとする。また，書名，論文名にはできるだけ訳語をつける。

**例**　Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron*. [*Japanese grammar*]. Tokyo: Hōbunkan.
**例**　Kuroda, S.-Y. (1980) Bunpoo no hikaku. [Comparison between Japanese and English grammar]. In: Tetsuya Kunihiro (ed.) *Nichieigo hikaku kooza 2: Bunpoo*. [*Comparative studies of Japanese and English 2: Grammar*], 23−62. Tokyo: Taishukan.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

**参照文献**

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.
Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.
服部四郎 (1976)「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2−14.
Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive*

*features and their correlates.* Cambridge, MA: MIT Press.
金田一京助(1932)『国語音韻論』東京: 刀江書院.
金田一京助(1955)「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下： 727–749. 東京：研究社.
Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171–202. New York: Holt, Rinehart and Winston.
Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind.* Chicago: University of Chicago Press.
Lakoff, George (1986b) Cognitive semantics. Berkeley Cognitive Science Report 36.
Lakoff, George and Mark Johnson (1980*) Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
南西太郎(2005)「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.
Postal, Paul (1970) On the surface verb "remind". *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.
Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
佐久間鼎 (1941)「構文と文脈」『言語研究』9: 1−16.
柴谷方良 (1978)『日本語の分析』東京：大修館書店.
Trubetzkoy, N.S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

・本文および注における参照文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

**例**　この問題については，山田孝雄(1908) も論じているように……
**例**　山田(1908: 584) は，「助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず，他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う。
**例**　Sapir (1925) notes that…
**例**　Bloomfield (1933: 347) remarks as follows: "The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences . . ."
**例**　In Optimality Theory (Prince and Smolensky 1993, Kager 1999),…
**例**　… as often mentioned in the literature (Chomsky 1980, 1990, Bresnan 1990, 1991, Hale 1996).

* * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

（引用終わり）

(14)**添付資料**：特に必要な場合には別冊にして資料を添付してもよい（データや図版などで 10 頁を越える場合など）。添付資料にも論文と同じ形式の表紙を付ける。音声資料などの CD などは、裏表紙の内側にポケットを作り、その中に入れる。

卒論に必要な手続きやスケジュールについては、言語学研究室のウェブサイトの「卒業論文」のページに示しているので、必ずチェックすること。

http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~linguist/soturon-schedule.html

以上